様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月 ２０ 日現在

機関番号：８７１１１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2012～2015
課題番号：２４７２０３７０

研究課題名（和文）古墳時代墓制の終焉過程からみた律令国家形成期の北部九州

研究課題名（英文）Northern Kyusyu of formative years seen from the ending process of the burial system of Kohun period

研究代表者
下原　幸裕（Shimohara, Yukihiro）

九州歴史資料館・その他部局等・研究員

研究者番号：３０６１５８３６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究では、北部九州各地の古墳時代墓制の終焉過程から、律令国家形成期の北部九州の社会について考察した。
　墓制の衰退に向かう諸変化は７世紀前半代にもみられるが、特に７世紀中頃以降は急速に墳丘や墓室規模が縮小し、副葬品も簡素になるなど、墓制の衰退が顕著となる。それは造墓における政治・社会的意義の減退を示し、律令国家形成に向かう社会の成長と発展が北部九州でも確実に進んでいることが明らかになった。

研究成果の概要（英文）：In this study, I considered the northern Kyusyu society of formative period of nation under the ritsuryo legal codes(the political system based on the ritsuryo codes) from the ending process of Kohun period’s burial system.
I can confilm various changes for a decline of burial system in the first half of 7th Century. But, from the middle of 7th Century onward, the decline of burial system such as the scale-down of mound and charnel room, and the simplification of grave goods is expressly able to make sure. These changes denote the collapse of the politically and socially meaning, on the other hand revealed that northen Kyusyu society absolutely continues to grow and develop toward the completion of the nation based on the ritsuryo codes.

研究分野：日本考古学

キーワード：古墳時代墓制　北部九州　国家形成

１．研究開始当初の背景

（１）これまで北部九州における古墳時代墓制の研究は、前方後円墳をはじめとした首長墓を中心に研究が進められており、６世紀代までの研究が多数を占めていた。そのため、７世紀代の墓制は６世紀から続く首長墓系譜や群集墳（横穴墓群）の研究の中で一括して取り上げられ、終末期墓制に特化した研究は低調であった。

（２）しかし、徐々に各地で、古墳時代から歴史時代への移行期としての「７世紀」を重要視することが考古学・歴史学の双方から叫ばれるようになった。とくに古墳時代墓制は、その在り方に当時の政治や社会、思想を強く反映しており、社会の変化を紐解くのに十分な研究資料であった。ただ、両時代の墓制を連続的に分析・考察するような研究はまだ少なく、文献史料なども踏まえた総合的な研究の必要が指摘されていた。

２．研究の目的

（１）古墳時代後半期の墓制は横穴式石室墳、横穴墓、石棺墓、木棺墓、土器棺墓、土壙墓など多様であるが、従来の研究では個々の墓制における様相の把握にとどまっていた。そこで、７世紀代を中心とする多様な墓制の在り方を明確にすることを第一の目的とした。

（２）また、汎列島的な視野から見れば北部九州の墓制はある程度のまとまりとして捉えることも可能であるが、実際には律令期の旧国単位あるいは平野・河川単位で墓制の在り方に相違がみられる。そこで、地域ごとの在り方を把握した上で、各地の墓制を比較、総合的に考察することで、共通性や差異性を明確にすることも研究の目的とした。

３．研究の方法

（１）近年では大規模開発が減少してきていることもあり、かつてほどの発掘調査事例の増加はないが、それでも各地で新たな調査や再調査などが進められており、地域ごとの調査成果が確実に蓄積されてきている。そこで、旧国単位で調査成果の網羅的な把握を行い、分析・考察に有用な資料を抽出することとした。

とくに北部九州での研究は、九州本島部を対象としたものが多く、壱岐や対馬、五島列島といった島嶼部の墓制にまで言及される例が少なかった。しかし、地域性や共通性を顕在化する上では不可欠な地域であり、いわば列島の周縁域における墓制の様相を明確にする必要もあるため、本研究では島嶼部も含めることとした。

（２）さらに、これまで横穴式石室墳や横穴墓群といった個別的な墓制の研究に終始しがちであったことから、地域ごとに全ての墓制を抽出し、総合的に分析を行うこととした。とくに土壙墓などの非高塚墓制については、高塚墓制より下位の墓制としての認識はあるものの、研究の俎上に載せられることがほとんどなく、その実態把握が遅れていた。そうした課題を克服する一助となるよう、本研究では、７世紀代における全ての墓制を研究の対象とし、総合的な墓制研究を行うこととした。

４．研究成果

（１）北部九州の古墳時代墓制は地域ごとに特徴があり、広域的な検討を行う前に、まずはそれらの把握を進めた。

なお、対象となる古墳などの時期については、筑前・牛頸窯跡群における編年案を基準とし、統一的な時期区分を用いることとした（６世紀末～７世紀初頭＝ⅣA 期、７世紀前葉＝ⅣB 期、７世紀中葉＝Ⅴ期、７世紀後葉～８世紀初頭＝Ⅵ期とした。以下、これに従い記述する）。

筑前　金武乙石 H1・H2 号墳のようにⅣA 期の段階で既に終末期方墳が築かれるなど、畿内における方墳の導入と連動する動きが首長層に確認できる。また、手光波切不動古墳や宮地嶽古墳のように横口式石槨の影響を受けた折衷様式の石室墳もいち早く出現していた。このうち方墳の採用は高塚群集墳でも確認できるが、やや歪な形態の事例が多く確認できた。

また、墳丘の周囲に土壙墓を伴う事例も散見され、無墳丘や低墳丘の竪穴系小石室や石蓋土壙墓、土壙墓などが従属的に営まれる状況が他地域よりも顕著であることが確認できた。

横穴墓は筑前東部地域で顕著にみられるが、墓室規模の縮小化や、縦長から横長への玄室形態の変化、副葬品の簡素化を読み取ることができ、とくにⅤ期を境とする変化が顕著であった。これは高塚群集墳と時期的にも共通する変化である。

筑後　これまで首長墳における終末期方墳の採用は確認できていないが、高塚群集墳では三沢古墳群などに事例があり、将来、首長墳においても事例が確認される可能性が高い。楠名古墳では玄室が前室よりも極端に小さい構造で、横口式石槨の影響を受けた構造と考えられる。ただし、玄門を有し、主軸に直交する横長形態である点など、北部九州における基本的な埋葬頭位に基づく構造を呈することから、横口式石槨の影響を受けながらも在地墓制の伝統が色濃い構造となっていると考えられる。

群集墳や横穴墓群では、ⅣB 期からⅤ期ごろに複数埋葬墓から単体埋葬墓へ移行し、それとともに縦長長方形や方形の玄室から横長方形の玄室へと変化する状況を確認した。ただし、三沢丘陵では石室墳よりも横穴墓の方が横長形態への変化が顕著で、ほとんど同調した変化でありながらも差異が存在した。

高塚古墳の周囲に土壙墓などが確認できる事例もあるが、筑後では集落域の縁辺部などで土壙墓群が形成される事例が顕著で、とくにⅤ期以降、奈良時代のⅦ期に至るまで続

く事例が多く確認できた。

豊前　橘塚古墳や甲塚方墳などⅣA 期には終末期方墳が採用されるが、とくに甲塚方墳は推古天皇陵と推定される山田高塚古墳と同じく長方形を呈しており、畿内との直接的な関係により方墳が採用された可能性がある。終末期方墳の採用は群集墳においても数多く確認でき、北部九州の中では最も事例が多い地域で、瀬戸内海を介した畿内型墓制の流入や受容が活発であったと推定することができる。

玄室形態は、横穴墓を含め縦長形→方形→横長形という流れが確認でき、単葬墓化への流れと同調していると推定される。一方で横長形への変化とは別に狭長な縦長形も別の系列として存在しており、横穴墓でも散見することができる。これは、畿内型もしくは瀬戸内海を経由した畿内型の墓制の影響と推定される。土壙墓などの墓制の在り方はあまり顕著でなく、将来の課題である。

豊後　畿内型石室もしくはその影響下にある瀬戸内地域の石室と折衷したような構造の事例が散見される。墳丘形態は円墳が多く、首長墓で方墳を採用しているのは古宮古墳や西田古墳に限られる。古宮古墳は刳り抜き式の横口式石槨を主体部とし、年代的にも壬申の乱の功臣、大分君恵尺が被葬者である可能性が高く、墳丘・墓室とも畿内から直接的に受容したと考えて良い。ただ、それは単発的な受容で、在来の墓制に影響を与えるものではなかった。

豊後の場合、横穴墓が卓越しているが、墓室形態は高塚石室墳と同様に、縦長方形→方形→横長方形と推移するが、狭長な縦長の形態が別系列として共存する事例がある。副葬品はⅤ期以後非常に簡素化する。

これらより下位の墓制はこれまで顕著ではないが、石棺墓があるとされる。

肥前　百度塚古墳などⅣA 期には首長層において終末期方墳の採用が認められるが、それほど事例は多くない。首長墓はⅣB 期ごろまで確認できるが、それ以後は不明確となり、群集墳中に埋没すると考えられる。

首長墓より下位の墓制としては、横穴墓が花浦横穴墓群の３基しかないため、高塚群集墳が基本である。石室構造は首長墓の形態を模しながら、縦長方形→方形→横長方形へと推移するが、他地域よりも横長の度合いが弱いように思われる。副葬品はⅣB 期ごろまでは後期古墳と同様に豊富であるが、Ⅴ期以後は急速に簡素化する。

肥前西部（長崎県下）は、高塚群集墳の形成が顕著ではなく、数基程度を単位とする小古墳群が多い。そうした中でも高下古墳のように豊富な副葬品を有する古墳は小地域の首長墓と推定される。それよりもやや下位に小古墳群が連なると考えられる。

非高塚墓制としては、金立開拓遺跡の古墳群中に竪穴系小石室と土壙墓で形成される一群が墓域の一角に形成される事例が注目できる。また、一野遺跡の石棺墓もあり、曲崎古墳群（積石塚群）では７世紀代の遺物も採集されていることから、群集墳より下位の墓制としてそうした墓制が営まれていると考えられる。

壱岐　後期中頃に三室構造の横穴式石室が国造墓級の有力首長墓に採用され、群集墳では二室構造が採用されるなど階層差が顕著となる。また、その有力首長墓では玄室に刳り抜き式石棺や箱式石棺が安置されており、旧来の石棺墓の伝統が作用したものと考えられる。

高塚墓制以外の墓制はあまり顕著ではないが、天ヶ原石棺群Ｂ地点ではⅥ期の須恵器が出土しており、より下位の墓制として石棺墓が継続していると考えられる。

対馬　ⅣA 期ごろにサイノヤマ古墳、ⅣB 期～Ⅵ期にかけて保床山古墳や矢立山１・２・３号墳などが地域の首長墓として築かれるが、保床山古墳を除き全て方墳であることが確認されている。段築方墳も多く、土石混合盛土である点に対馬の独自性があるにしても、釘付式木棺の採用も含めて積極的に畿内型墓制の導入が図られている。

これより下位の墓制としては石棺墓が確認できる。棺内から確実に７世紀代の土器が出土する事例は少ないが、石棺墓群などで７世紀代の土器が出土する事例は数多いことから、高塚墓制に埋葬される首長層とは別に、より下位の人々は弥生時代以来の伝統的な墓制を継続して営んでいたと考えられる。

（２）各地域の首長墓をみてみると、ⅣA 期でも古い段階において、墳丘形態に方墳を採用している事例をみることができ、畿内の王陵や有力古墳における墓制の変化に連動した動きが確認できる。

また、ⅣA 期には全てに普及しているわけではないが、横口式石槨墓の影響を受けた石室構造の受容や釘付式木棺の受容など、畿内型の終末期墓制の影響もみられるようになる点で１つの画期を見出せた。

一方で、ⅣB 期までは顕著な事例が確認できるが、Ⅴ期以後は確実な首長墓がほとんど確認できなくなる。これは墳丘規模や主体部の縮小化によるもので、群集墳の副葬品の様相からすれば副葬品の簡素化も含めた諸変化が首長墓以外の古墳との階層差を視覚的に捉え難くしてしまったと考えた。

なお、階層差という点においては、筑前西部や筑後、肥前などでは高塚古墳や横穴墓以外にも、同一墓域内に竪穴系小石室や石蓋土壙墓、土壙墓などが営まれる事例が多く、他地域に比べ階層分化がより複雑に進んでいたと考えられる。

筑前西部や肥前地域では横穴式石室による群集墳が主体的で、筑前東部や豊後では横穴墓群が数多く営まれるなど、地域によって各墓制の占める割合が明確に異なる。これは、石材入手が容易である地域とそうでない地

域、広い平野に恵まれず造墓に関わる集団の規模に自ずと制限がかかる地域などの違いが墓制の在り方に違いをもたらした要因と推定できる。

とくに肥前東部や対馬では、広大な平野がなく、個々の集団が地形的に分断されていたと考えられ、大規模な集団の形成を困難にしていたことが、列島各地にみられるような高塚群集墳の形成に制限をかけていたのであろう。

（３）群集墳や横穴墓群をみると、IVB 期ないしはＶ期まで複数埋葬墓が主体であり、墓室も縦長長方形や正方形の形態が大半を占めていたが、Ｖ期ごろには横長方形が増加し、VI期には横長方形が主体となる状況が確認でき、玄室長の短縮化により単葬墓へと移行していく状況が明らかとなった。これは、従来より指摘がある「個人墓」への変化として注意される。

一方で、横長へと変化する一群とは別に、狭長な縦長長方形を基調とする墓室の事例が各地で確認できた。これは各時期に存在し、墓室の縮小化もみられることから、横長の系列とは別の系列として存在することは明らかである。この縦長を基調とする系列については、墓室の主軸に平行して遺体や棺を安置することが多い畿内型墓制の影響によるものと考えた。こうした縦長基調の墓制は横穴式石室だけではなく横穴墓においても散見され、様々な階層の墓制に影響を与えているが、地域の中での主体を占めるほどには普及しなかった。

（４）副葬品組成をみると、馬具や刀剣類を中心とした後期古墳以来の組成はIVB 期（一部Ｖ期）ごろを下限とし、Ｖ期以降は若干の鉄鏃や刀子などを保有する程度となり、簡素な組成へと急激に変化する状況が確認できた。この変化は基本的に各階層を通じて生じており、刀子や玉類など個人の携行品や装身具に限られていく。あくまで個人の所有物で、政治的・社会的な身分・階層を表徴するような財ではないことから、Ｖ期以降においては墓室空間における喪葬祭祀の場で、参列者に対する政治的・社会的な意義の発信が不要になっていたと考えられる。それは、古墳が単なる「死者の埋葬の場」へと変容したことに他ならない。

（５）以上の検討から、７世紀前葉のIVB 期までは、終末期方墳や、縦長基調の墓室、横口式石槨構造、釘付式木棺の受容など新たな墓制へと推移している状況が確認できるが、墓室規模や副葬品の面では後期古墳からの継続性が窺えた。

ところが７世紀中葉（Ｖ期）になると、墳丘規模や墓室規模の縮小化、個人墓化、副葬品の簡素化といった諸変化が顕著となり、各階層において急激に墓制の変容が生じる。

この７世紀中頃の諸変化は、明らかに墓制としての衰退を示しており、政治性や社会性を付加された「古墳」という存在から、単純に遺体を収納する施設・場としての「墓」へと変容したことを意味する。

それは古墳文化としては衰退現象といえるが、社会変化を鑑みれば社会の成長と換言することができる。その後の律令国家成立への動きは、６世紀末ごろに生じた前方後円墳の終焉、終末期方墳の出現をはじめとする諸変化も１つの画期と捉えることができるが、墓制の在り方を通時的にみれば７世紀中頃の変化は大きな変革を伴っていたと考えられる。

そうした動きは、当然ながら東アジア世界の動向と密接に関わっており、より広い視野での検討を要するが、それは今後の検討課題としたい。また、内的にも政治・社会・宗教・軍事といった様々な要素において各々が有機的に連動しながら前進していったことはいうまでもないが、それらの分野の研究についても今後の課題としたい。

※本研究の成果の詳細については、『古墳時代墓制の終焉過程からみた律令国家形成期の北部九州』を刊行したので、そちらを参照されたい。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計５件）

①下原幸裕、筑前における古墳文化終焉の一様相―観音山古墳群の再検討―、九州歴史資料館研究論集、査読有、38 巻、2013、21-36

②下原幸裕、頸基部に突帯を有する須恵器壺・瓶、福岡大学考古学論集２―考古学研究室開設 25 周年記念―、査読無、2013、183-194

③下原幸裕、北部九州における横口式石槨の影響、九州歴史資料館研究論集、査読有、39 巻、2014、11-26

④下原幸裕、前方後円墳の終焉と「終末期」の開始、九州歴史資料館研究論集、査読有、40 巻、2015、71-80

⑤下原幸裕、日本北部九州と栄山江流域横穴式石室の比較検討、三国時代伏岩里勢力の位相と周辺地域の動向、査読無、2015、159-177

〔学会発表〕（計３件）

①下原幸裕、五郎山古墳とその時代、県政出前講座、2013 年 7 月 16 日、筑紫南コミュニティーセンター

②下原幸裕、古賀の古墳時代、県政出前講座、2014 年 7 月 8 日、古賀市立古賀東小学校

③下原幸裕、日本北部九州と栄山江流域横穴式石室の比較検討、国立羅州文化財研究所開所 10 周年記念国際学術大会、2015 年 10 月 14・15 日、大韓民国国立羅州文化財研究所

〔図書〕（計１件）
①下原幸裕、九州歴史資料館、古墳時代墓制の終焉過程からみた律令国家形成期の北部九州、2016、56 頁

６．研究組織
(1)研究代表者
下原幸裕（SHIMOHARA, Yukihiro）
九州歴史資料館・その他部局等・研究員
研究者番号：２４７２０３７０

(2)研究分担者
なし
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
なし
（　　）

研究者番号：